

お弁当

おおくわくん

お弁当と聞くと中学時代、毎日学校に持って行った母の手作り弁当を思い出す。

私のお弁当には毎日厚焼き卵が入っていた。卵6個を使うぐるぐる渦を巻いた渾身の卵焼きである。これが二切れから三切れ必ず入っており、お弁当箱のかなりのスペースを占めていたせいで、その他のおかずは大してなく、あとは白飯又はおにぎりが収まっているというようなお弁当であった。一度、なぜあのように大きな卵焼きを作るのかと母に聞いたら「卵焼きは大きい方が美味しいだろうと思って」との答えが返ってきた。実際卵焼きは美味しかったので、「確かにそうね」と静かに納得した。

そんな私にも母のお弁当に対して日々思うところがあった。

それは、見た目があまりよくないことだった。

昼食は班ごとに向き合う形に変えて食べるようになっており、その時私の向かいに座る男子の持参するお弁当は料亭レベルのものだった。2段重ねの弁当箱にそれぞれ肉魚、煮物など多彩なおかずが見栄え良く詰めこまれていた。

それを男子は鷹揚にゆっくりと、まるでお公家さんのように上品に口に運ぶのだ。肌が透き通るように白い男子であった。後に家がお寺さんだと聞いた。

家に帰って、男子のお弁当の豪華さを母に報告すると、ニヤニヤしながら「男の子のお母さんは頑張るからね」と返ってきた。

当然のことだがお弁当作りに子供の性別は関係ない。釈然としない気持ちを抱えながら、毎日、お弁当箱のふたを開けるのが、ささやかな憂慮であった。あの、あっけらかんとした様子では品数を増やし、もう少し見た目を良くしてくれと言ったところで多くを望めなさそうだった。

母の料理は家でも素朴だが味で勝負のものであった。いつも美味しかったので満足して食べていた。そんな料理を毎回作ってくれる母が大好きで、幸せだった。

それなのに、衆目を浴びるお弁当となると、一転して母の料理を恥ずかしく思うようになり、ささっと済まさないければならなくなるのは中学生が考えても母が不憫であった。そこで、美味しいのだからいいではないか、と自らに言い聞かせていた。

そんなある日、“事件”が起きた。

その日のお弁当のおかずは、例の卵焼きが消え、前の晩のおかずのおでんが、使い古しのタッパーに無造作に詰め込まれたものであった。しかもかなりのつゆが入っており、こぼれはしないかと心配になった。冷えたおでんの彩りは当然よくない。ちくわ、こんにゃく、大根、がんもどき、こんぶ...一面薄茶色の世界が広がっている。

あれから40年がたった今なら、母のために思うことはいろいろある。朝の忙しい中、毎日のお弁当作りはそれなりに大変である。あのようなおでんには賛否が分かれるかもしれないが、前夜の残り物をおかずにするのは日常だ。

しかし、経験の未熟な見栄っ張りの思春期女子には衝撃が走った。これを皆の前で、あの公家の前で食べるというのか。あり得ない、これだけは許せない、と思ったのだ。タッパーのふたを端だけ開けて中を隠しながら食べたように記憶している。その間、恥ずかしさのあまり気が気ではなかった。

これはもう抗議せねばと帰宅するなり母に、あのようなお弁当は2度と作るなときっぱり言い渡した。

「あら本当、いいと思ったんだけどねえ。わかったよ」

エヘヘという感じであった。私の日々の葛藤をどれだけ理解しているのか。何もわかっていないのだろうな。

その後、おでん弁当のようなお弁当は出てこなかった。高校に入るとお弁当が楽しみにすらなかった。母もお弁当作りに慣れたのだろう。

今振り返っても、母のお弁当というと、あの大きなぐるぐる渦の巻いた卵焼きとおでん弁当しか思い浮かばない。

(1,484 字)